

博士論文（要約）

論文題目 近世日本における災害の宗教学的的研究
——呪術・終末・慰霊・象徴——

氏名 朴 炳道

目次

第一章 「災害と宗教」研究序説.....	7
1. 非日常的な危機事態に向き合う人間：その認識と対処の問題.....	8
2. 「災害」とは何か：「災害」定義の問題.....	8
2. 1. 「災害」をめぐる各言語圏での研究状況.....	9
2. 2. 「災害」定義の難しさと曖昧さ——自然性と人為性、歴史性と地域性.....	15
2. 3. 本研究における作業仮説的な災害の定義と範囲.....	22
3. 「災害」をめぐる宗教学的理解の歴史.....	24
3. 1. 「ユートピア」の契機としての「災害」理解.....	26
3. 2. 「トラウマ」としての「災害」理解.....	29
4. 本研究の構成——「近世日本における災害の宗教学的的研究」.....	33
4. 1. 本研究における宗教学的観点——呪術・終末・慰霊・象徴.....	34
4. 2. 本研究の対象と資料.....	37
4. 3. 各章の構成.....	38
第二章 「災害見聞記」からみる呪術と終末——1662年の近江・若狭地震と『かなめいし』	47
1. 「災害見聞記」と中世日本における災害の記録.....	48
1. 1. 「災害見聞記」の原型としての『方丈記』.....	48
1. 2. 『立正安国論』における災害叙述.....	50
2. 1662年の近江・若狭地震の「災害見聞記」：浅井了意の『かなめいし』.....	52
2. 1. 浅井了意と『かなめいし』.....	52
2. 2. 『かなめいし』に関する先行研究.....	53
2. 3. 浅井了意の災害観と叙述の性格.....	54
3. 『かなめいし』に表れている災害除けの呪術と信仰.....	55
3. 1. 地震除けの呪文「世なおし」.....	55
3. 2. 「歌」を「札」に書いて貼る.....	57
3. 3. 神がかりと託宣.....	60
3. 4. 「鹿島信仰」：鹿島大明神・要石・竜.....	63
4. 『かなめいし』の終末論——「災害終末」(Disaster Apocalypse)のイメージ.....	63
4. 1. 日本における代表的な終末のイメージ：「泥の海」.....	64
4. 2. 「泥の海」のカオスと「液状化現象」.....	66
4. 3. もう一つの終末のイメージ：「火の玉」・「火の雨」.....	67

5. おわりに：日本民俗・民衆宗教史における「災害」の意味.....	68
第三章 近世火災における死・埋葬・慰霊——1657年の明暦の大火と回向院の開創.....	73
1. 近世災害における大量の死者.....	74
2. 明暦の大火と回向院.....	75
2. 1. 明暦の大火の概要と『むさしあぶみ』.....	75
2. 2. 大量死者の発生.....	76
2. 3. 集団埋葬と回向院の開創.....	77
3. 「諸宗山無縁寺回向院」再考.....	79
3. 1. 集団埋葬と無縁塚：寺檀制度下における集団埋葬の意味.....	79
3. 2. 寺院と慰霊儀式の宗派問題：果たして諸宗派の寺院・超宗派の儀式なのか.....	81
3. 3. 「諸宗」の「無縁」死者を「回向」することの意味.....	83
4. 近世における「回向院」の性格.....	86
4. 1. 明暦の大火の死者慰霊と災害記憶の空間.....	86
4. 2. 他の災害死者の埋葬と慰霊の空間.....	87
4. 3. 異常死者や動物の慰霊の空間.....	88
4. 4. 開帳・巡礼・勧進相撲の空間.....	89
5. 近世における回向院の位置付け：「諸宗山」から「国豊山」への山号の変更.....	90
6. おわりに：トラウマの空間からユートピアの空間へ.....	92
第四章 近世飢饉における死・埋葬・慰霊——1732～1733年の享保の大飢饉を中心に.....	97
1. 近世日本の飢饉災害と飢饉死者.....	98
2. 享保の飢饉の概要と死者の発生.....	100
3. 飢饉死者の埋葬と慰霊.....	103
3. 1. 飢饉における死のかたちと個別埋葬.....	103
3. 2. 集団埋葬.....	104
3. 3. 藩からの慰霊：施餓鬼の修行.....	105
3. 4. 民間での慰霊：飢人墓、飢人供養塔、飢人地蔵像、飢人地蔵祭.....	106
4. 『飢人地蔵物語』にみる享保の飢饉の慰霊.....	106
4. 1. 地蔵像と「飢人地蔵信仰」のはじまり.....	107
4. 2. 飢饉供養塔と村での死者慰霊.....	112
5. 享保の飢饉における飢人地蔵信仰の背景と飢饉死者の性格.....	118
第五章 近世災害死者をめぐる認識と実践：「無縁」の近世的意味.....	121
1. 災害死者の特徴：大量の無縁死者の発生.....	122
2. 「無縁」概念の展開と死者としての「無縁」.....	123

2. 1. 現代における「無縁社会」と「無縁死」：社会構造としての「無縁」	123
2. 2. 中世日本における「無縁所」：空間と身分としての「無縁」	124
2. 3. 死者としての「無縁」：「無主」と「無遮」	125
3. 無縁死者への認識とその歴史	126
3. 1. 生者による認識論的な「無縁」死者の創出	126
3. 2. 東アジアにおける「無縁死者」の位置付け	127
3. 3. 中世日本における災害死者と「法界」・「三界万霊」	129
4. 災害供養塔からみる近世災害死者への認識：「無縁」・「有縁無縁」・「三界万霊」	132
4. 1. 「明暦の大火」と「享保の飢饉」での災害死者	132
4. 2. 「浅間山大噴火」と「島原大變肥後迷惑」での災害死者	133
4. 3. 「天明・天保の飢饉」での災害死者	134
4. 4. 近世災害死者の呼び方	135
5. 近世における災害の「無縁死者」と「無縁生者」の動態的關係	137
5. 1. 死者発生と集団埋葬における「無主性」の認識と「無遮性」の創出	137
5. 2. 災害死者の慰霊における「生者と死者」の關係と「無主・無遮」	139
5. 3. 「無縁」・「有縁無縁」・「三界万霊」としての災害死者の意味	142
6. おわりに：トラウマと「無縁」	143

第六章 近世疫病における災害の象徴化——1862年の文久麻疹大流行と「はしか絵」の登場	147
1. はじめに	148
2. 日本における疫病の歴史：疱瘡・麻疹・コレラ	149
2. 1. 疱瘡	150
2. 2. 麻疹	151
2. 3. コレラ	151
3. 文久二年（1862）の麻疹大流行と「はしか絵」の登場	153
3. 1. 文久二年の麻疹大流行	153
3. 2. 「はしか絵」の登場	156
4. 「はしか絵」の災害象徴1——災害原因の象徴化	160
4. 1. 麻疹を起こす存在	160
4. 2. 麻疹の歴史性と周期性の説明	161
4. 3. 麻疹の症状と発病過程の説明	163
5. 「はしか絵」の災害象徴2——災害対処の象徴化	165
5. 1. 麻疹を防ぐ・治す存在	165
5. 2. 呪術・まじない	169
5. 3. 養生	173

5. 4. 世相を描いたもの.....	176
6. 麻疹大流行における「はしか絵」の意味：「呪術」と「情報提供」の観点を超えて.....	179
第七章 幕末災害の象徴化と「災害錦絵」——「疱瘡絵」・「鯰絵」・「はしか絵」・「コレラ絵」の相互比較を通して	187
1. はじめに：「災害象徴」と「災害錦絵」	188
2. 幕末の災害と「災害錦絵」の登場.....	189
2. 1. 「疱瘡絵」	190
2. 2. 1855年の安政江戸地震と「鯰絵」	192
2. 3. 1858年の安政コレラ大流行と「コレラ絵」	193
2. 4. 1862年の文久麻疹大流行と「はしか絵」	193
3. 災害を起こす存在と災害を防ぐ存在—悪神と善神、そして象徴変換.....	194
3. 1. 「災害錦絵」における災害の神：悪神と善神.....	194
3. 2. 「災害錦絵」における象徴の変換と無変換：「鯰絵」vs.「はしか絵」・「コレラ絵」.....	196
3. 3. 象徴変換の理論：「災害の世直し」と「災害ユートピア」	201
3. 4. 象徴無変換の理論：「災害の類型論」	204
4. 「災害錦絵」における風刺と死.....	208
4. 1. 「災害錦絵」における「諧謔」と「風刺」	209
4. 2. 「災害錦絵」における「死」と「悲しみ」	211
4. 3. 「災害錦絵」における「諧謔」と「悲嘆」の間.....	213
5. 「災害錦絵」の呪術性と実用性.....	215
5. 1. 「災害錦絵」の呪術性.....	215
5. 2. もう一つの実用性：「情報性」	219
5. 3. 「災害錦絵」の複合的な実用性.....	221
6. カテゴリとしての「災害錦絵」	222
第八章 まとめと展望——「災害と宗教」研究の可能性.....	229
1. 今までのまとめと本研究の意義.....	230
2. 今後の課題と展望.....	234
2. 1. 日本宗教研究の観点から.....	234
2. 2. 比較研究の観点から.....	237
2. 3. 一般理論化の観点から.....	239
参考文献	243

本文

5年以内に出版予定

参考文献

1. 和書（論文及び単行本）

- 浅井了意著、朝倉治彦校注・解説『江戸名所記』名著出版、1976.
- 浅井了意著、井上和人校注・訳『かなめいし』『新編日本古典文学全集』64 仮名草子集、小学館、1999、pp. 11-83.
- 浅井了意著、土田衛編『愛媛大学古典叢刊 8 かなめいし』愛媛大学古典叢刊刊行会、1971.
- 阿部安成「鯰絵というテキスト、解釈としての鯰絵」『民衆史研究』53、1997、pp. 15-46.
- 「鯰絵のうえのアマテラス」『思想』912、2000、pp. 25-52.
- 網野善彦『増補 無縁・公界・楽——日本中世の自由と平和』平凡社、1996（初版1978、増補版1987）.
- 荒井周夫編『福岡県碑誌』筑前之部、大道学館出版部、1929.
- アルネ・カラン、ヨン・ペデルセン「福岡藩領における飢饉と人口」江藤彰彦訳、西日本文化協会編『福岡県史』近世研究編 福岡藩（四）、福岡県、1989、pp. 233-278.
- 池上彰彦「江戸火消制度の成立と展開」西山松之助編『江戸町人の研究』第五巻、吉川弘文館、1978、pp. 91-170.
- 池上良正「宗教学の方法としての民間信仰・民俗宗教論」『宗教研究』74（2）、2000、pp. 167-190.
- 『死者の救済史——供養と憑依の宗教学』角川選書、2003.
- 「宗教学のなかの民俗・民衆宗教研究」『季刊日本思想史』72、2008、pp. 53-70.
- 「無縁供養の動態性」『宗教研究』86（2）、2012、pp. 193-217.
- 「宗教学の研究課題としての『施餓鬼』」『駒沢大学文化』32、2014、pp. 69-94.
- 池田丈明「日本中世の戦乱・飢饉に対応した五山の施餓鬼についてのノート」『正眼短期大学研究紀要』6、2013、pp. 1-8.
- 「室町将軍と五山の施餓鬼——明德三年四月十日の施餓鬼を中心に」『年報中世史研究』38、2013、pp. 147-164.
- 池澤 優「中国の死生観（古代・中世篇）——中国古代・中世における“死者性”の転倒」同『死および死者崇拜・死者儀礼の宗教的意義に関する比較文化的・総合的研究』（平成12—14年度科学研究費補助金 研究成果報告書）、2003.
- 池澤 優・アンヌブッシィ編『非業の死の記憶——大量の死者をめぐる表象のポリティックス』秋山書店、2010.
- 石垣絵美「疱瘡絵の画題と疱瘡除け」『國學院雑誌』118（7）、2017、pp. 19-43.
- 石隈聡美「鯰絵と板元」『國學院雑誌』116（7）、2015、pp. 21-48.

- 石原 和「文政大地震と如来教——“その時”に向き合う教説」『日本思想史研究会会報』33、2017、pp. 96-114.
- 磯田通史『天災から日本史を読み直す——先人に学ぶ防災』中公新書 2295、中央公論新社、2014.
- 伊藤恭子編『くすりの博物館収蔵資料集④ はやり病の錦絵』内藤記念くすり博物館、2001.
- 伊藤唯真「無縁霊とその祭碑」大島健彦編『無縁仏』岩崎美術社、1988、pp. 104-121（初出は、同「<法界>霊とその祭碑」日本民俗学会編『日本民俗学の課題：柳田国男生誕百年記念研究発表』弘文堂、1978、pp. 225-237）.
- 稲場圭信「東日本大震災における宗教者と宗教研究者」『宗教研究』86（2）、2012、pp. 219-242.
- 稲場圭信・黒崎浩行編『叢書 宗教とソーシャル・キャピタル 4 震災復興と宗教』明石書店、2013.
- 井上 洋『明治前期の災害対策法令』第一巻、論創社、2018.
- 『茨城県警吏必携』乾第1編（明治9年1月—明治12年6月）、茨城県、1879.
- 今村明恒「災害除け」『鯨のざれごと』三省堂、1941、pp. 181-186.
- 岩田重則「第6章 葬式仏教の形成」末木文美士他編『新アジア仏教史 13 日本III 民衆仏教の定着』佼成出版社、2010、pp. 275-326.
- 宇高良哲編『江戸浄土宗寺院寺誌史料集成』大東出版社、1979.
- 浦野正樹「災害研究の成立と展開」大矢根淳ほか編『シリーズ災害と社会 1 災害社会学入門』弘文堂、2007、pp. 18-25.
- 江川純一・久保田浩「「呪術」概念再考に向けて——文化史・宗教史叙述のための一試論」江川純一・久保田浩編『「呪術」の呪縛』上巻、リトン、2015、pp. 7-44.
- NHK 無縁社会プロジェクト取材班編『無縁社会——“無縁死”三万二千人の衝撃』文藝春秋、2010.
- 大島健彦編『無縁仏』岩崎美術社、1988.
- 大隅和雄『方丈記に人と栖の無常を読む』吉川弘文館、2004.
- 大矢根淳「明治前期の災害研究——『地震報告』をめぐる」川合隆男編『近代日本社会調査史 I』慶應通信、1989、pp. 113-135.
- 岡田章雄「両国」同『明治の東京——外国人の見聞記』桃源社、1978、pp. 229-240.
- 荻野夏木「伝承と絵画に見る疫病神——近世以降における疱瘡と麻疹の表象」『説話・伝承学』19、2011、pp. 88-109.
- 尾崎雄二郎編『訓読説文解字注』竹冊、東海大学出版会、1991.
- 『訓読説文解字注』匏冊、東海大学出版会、1993.
- 桂島宣弘「民衆宗教研究・研究史雑考」『日本思想史学』34、2002、pp. 27-35.
- 加藤光男「鯨絵に関する基礎的考察——その種類と異版」『埼玉県立博物館紀要』18、1993、pp. 81-126.

- 「江戸っ子の「世論」形成と風刺画——鯀絵を素材として」『地方史・研究と方法の最前線』雄山閣出版、1997、pp. 88-105.
- 「浮世絵を読み直す——江戸っ子のマスメディア」『埼玉県立歴史資料館研究紀要』22、2000、pp. 77-108.
- 「天保期以降の出版メディアの特質とその流通」『関東近世史研究』51、2002、pp. 4-25.
- 「文久2（1862）年の麻疹流行に伴う麻疹絵の出版とその位置づけ」『文書館紀要』15、2002、pp. 55-70.
- 加藤 貢「江戸市民と葛西金町村の半田稲荷」『国立歴史民俗博物館研究報告』155、2010、pp. 59-85.
- 仮名垣魯文編『安政項痢流行記』天寿堂、安政五年九月（1858）刊行、早稲田大学図書館所蔵.
- 鴨 長明著、神田秀夫校注・訳『方丈記』『新編日本古典文学全集』44、小学館、1995、pp. 13-37.
- 鴨 長明著、築瀬一雄訳注『方丈記現代語訳付き』角川文庫、2010（初版1967）.
- 川添昭二著、福岡古文書を読む会校訂『新訂黒田家譜』第四巻、文献出版、1982.
- 川部裕幸「疱瘡絵の文献的研究」『日本研究：国際日本文化研究センター紀要』21、2000、pp. 117-145.
- 川村邦光『戦死者のゆくえ——語りと表彰から』青弓社、2003.
- 川村純一『病いの克服——日本疱瘡史』思文閣出版、1999.
- 神田秀雄『如来教の思想と信仰——教祖在世時代から幕末期における』天理大学出版部、1990.
- 「民衆宗教の成立と近世社会」『日本思想史研究会会報』30、2013、pp. 2-21.
- 『如来教の成立・展開と史的基盤——江戸後期の社会と宗教』吉川弘文館、2017.
- 菊岡沾涼著、小池章太郎編『江戸砂子』東京堂出版、1976.
- 菊池勇夫『飢饉の社会史』教倉書房、1994.
- 『近世の飢饉』吉川弘文館、1997.
- 『飢饉』集英社、2000.
- 『飢饉から読む近世社会』教倉書房、2003.
- 「近世の餓死者供養について」関根達人編『供養塔の基礎的調査に基づく飢饉と近世社会システムの研究』（平成16年度—18年度科学研究費補助金研究成果報告書）、2007.
- 「飢饉死のリアリティー——仙台藩天保七・八年の飢饉の場合」『キリスト教文化研究所研究年報 民族と宗教』47、2014、pp. 1-27.
- 「飢饉と災害」大津透ほか編『岩波講座日本歴史』第12巻：近世3、岩波書店、2014、pp. 283-318.

- 菊池万雄「回向院過去帳」『日本大学文理学部自然科学研究所研究紀要』5、1970、pp. 1-29.
- 気谷 誠『鯀絵新考——災害のコスモロジー』筑波書林、1984.
- 「鯀絵に見る江戸庶民の地震観——儀礼としての災害」『建築雑誌』103 (1272)、1988、pp. 34-37.
- 「地震を洒落のめせ——鯀絵サイコセラピー説」宮田登・高田衛監修『鯀絵——震災と日本文化』里門出版、1995、pp. 126-128.
- 北原糸子『地震の社会史——安政大地震と民衆』講談社、2000 (初版 1983).
- 「なぜ、いま鯀絵か」宮田登・高田衛監修『鯀絵——震災と日本文化』里門出版、1995、pp. 129-132.
- 『日本震災史——復旧から復興への歩み』ちくま新書 1210、筑摩書房、2016.
- 北原糸子編『日本災害史』吉川弘文館、2006.
- 北原糸子・松浦律子・木村玲欧編『日本歴史災害事典』吉川弘文館、2012.
- 木村敏明「震災死者と宗教」国際宗教研究所編『現代宗教 2012——「特集」大災害と文明の転換』秋山書店、2012、pp. 158-173.
- 窪 徳忠『道教の神々』講談社学術文庫、1996.
- 倉知克直『江戸の災害史——徳川日本の経験に学ぶ』中公新書 2376、中央公論新社、2016.
- 黒木 喬『明暦の大火』講談社、1977.
- 『江戸の火事』同成社、1999.
- 黒田日出男『竜の棲む日本』岩波書店、2003.
- 『元延実録』国立公文書館内閣文庫所蔵写本、請求番号 150-0101.
- 『現代思想』9月臨時創刊号第 39 巻第 12 号、青土社、2011.
- 小川武彦「仮名草子四篇に見る天災地変の文芸性と記録性」暉峻康隆編『近世文芸論叢』中央公論社、1978、pp. 61-76.
- 国際宗教研究所編『阪神大震災と宗教』東方出版、1996.
- 『現代宗教 2012——「特集」大災害と文明の転換』秋山書店、2012.
- 『現代宗教 2015——「継続特集」3.11 後を拓く』秋山書店、2015.
- こころのケアセンター編『災害とトラウマ』みすず書房、1999.
- 小原 亭『『かなめいし』の文芸性——虚構化の方法をめぐって』『立命館文学』592、2006、pp. 520-527.
- 『『かなめいし』の文芸方法——中・下巻を中心に了意の創作意図を探る』『日本文藝學』48、2012、pp. 29-47.
- 小山 弘・佐藤健一郎校注・訳『道成寺』『新編日本古典文学全集』59 謡曲集 2、小学館、1998、pp. 285-300.
- 斎藤長秋・斎藤莞斎・斎藤月岑著、鈴木棠三他校注「国豊山回向院」『新版江戸名所図会』下巻、角川書店、1975、pp. 480-489.
- 斎藤月岑著、今井金吾校訂『定本武江年表』上巻、筑摩書房、2003.

- 『定本武江年表』中巻、筑摩書房、2003.
- 『定本武江年表』下巻、筑摩書房、2004.
- 酒井シヅ「近世社会とコレラ」同編『疫病の時代』大修館書店、1999、pp. 65-77.
- 坂巻甲太「浅井了意試論——『むさしあぶみ』『かなめいし』をめぐって」『近世文芸研究と評論』5、1973、pp. 1-26.
- 「報道作家としての浅井了意」暉峻康隆編『近世文芸論叢』中央公論社、1978、pp. 77-91.
- 坂巻甲太他編『『むさしあぶみ』校注と研究』桜楓社、1988.
- 櫻井義秀・濱田陽編『叢書 宗教とソーシャル・キャピタル1 アジアの宗教とソーシャル・キャピタル』明石書店、2012.
- 咲山恭三『博多中州ものがたり』後編、文献出版、1980.
- 佐々木潤之介『幕末社会論:「世直し状況」研究序論』塙書房、1969.
- 『世直し』岩波書店、1979.
- 佐藤弘夫「祟り・治罰・天災——日本列島における災禍と宗教」『宗教研究』86 (2)、2012、pp. 133-156.
- 滋賀市子『<神>と<鬼>の間——中国東南部における無縁死者の埋葬と祭祀』風響社、2012.
- 史学会編『史学雑誌』127号、2018年6月.
- 柴多一雄「第五編第三章 享保期の福岡藩政」西日本文化協会編『福岡県史』通史編 福岡藩 (二)、福岡県、2002、pp. 85-120.
- 島菌 進「民衆宗教か、新宗教か——二つの立場の統合に向けて」『江戸の思想1 救済と信仰』ペリカン社、1995、pp. 158-169.
- 「宗教者と研究者の連携」稲場圭信・黒崎浩行編『叢書 宗教とソーシャル・キャピタル4 震災復興と宗教』明石書店、2013、pp. 159-178.
- 島原市仏教会編『たいへん: 島原大変二百回忌記念誌』島原市仏教会、1992.
- 庄司吉之助『世直し一揆の研究』校倉書房、1970.
- 白川 静『字通』平凡社、1996.
- 『シリーズ災害と社会』弘文堂、2007-2009.
- 震災予防調査会編『大日本地震史料』甲・乙巻、震災予防調査会、1904.
- 寺院本末帳研究会編『江戸幕府寺院本末帳集成』上巻、雄山閣出版、1981.
- 『江戸幕府寺院本末帳集成』下巻、雄山閣出版、1981.
- 浄土宗開宗八百年記念慶讃準備局『浄土宗全書』一八巻、浄土宗開宗八百年記念慶讃準備局、1973.
- 菅江眞澄著、内田武志・宮本常一編『菅江眞澄全集』第一巻、未来社、1971.
- 『菅江眞澄全集』第九巻、未来社、1973.
- 鈴木明子「半田稻荷社の略縁起と願人坊主」『宗教民俗研究』9、1999、pp. 33-49.

- 鈴木則子「江戸時代の麻疹と医療——文久二年麻疹騒動の背景を考える」『日本医史学雑誌』50 (4)、2004、pp. 501-546.
- 『江戸の流行り病——麻疹騒動はなぜ起こったのか』吉川弘文館、2012.
- 須藤由蔵著、鈴木棠三・小池章太郎編『近世庶民生活史料 藤岡屋日記』第十卷、三一書房、1991.
- 関 俊明『災害を語り継ぐ——複合的視点からみた天明三年浅間災害の記憶』雄山閣、2018.
- 関根達人編『津軽の飢饉供養塔』弘前大学人文学部文化財ゼミナール調査報告Ⅲ、2004.
- 『下北・南部の飢饉供養塔 補遺津軽の飢饉供養塔』弘前大学人文学部文化財論ゼミナール調査報告Ⅴ、2005.
- 『供養塔の基礎的調査に基づく飢饉と近世社会システムの研究』(平成16年度—18年度科学研究費補助金研究成果報告書)、2007.
- 『津軽の近世墓標』弘前大学人文学部文化財ゼミナール調査報告Ⅶ、2007.
- 『松前の墓石から見た近世日本』北海道出版企画センター、2012.
- 太極著・東京大学史料編纂所編纂『碧山日録』上巻、岩波書店、2013.
- 大正大学宗教学会編『宗教学年報』27、「中間報告・東日本大震災と宗教——福島県いわき市の事例から」、2012.
- 『宗教学年報』29、「共同報告・東日本大震災と宗教——福島県いわき市の事例から」、2014.
- 高田 衛「笑う鯨に泣く鯨——地震の江戸民俗誌」『民俗文化』8、1996、pp. 217-241.
- 高橋 敏『幕末狂乱——コレラがやって来た』朝日新聞社、2005.
- 高橋 原「臨床宗教師の可能性——被災地における心霊現象の問題をめぐって」国際宗教研究所編『現代宗教2013——「特集」3・11後を拓く』秋山書店、2013、pp. 188-208.
- 高橋昌明「瘡瘡神（狸々）やあーい」『日本史研究』324、1989、pp. 97-104.
- 立石 晁編『福岡県近世災異誌』、福岡県近世災異誌刊行会、1992.
- 立川昭二『日本人の病歴』中公新書449、中央公論社、1976.
- 『近世病草紙——江戸時代の病気と医療』平凡社、1979.
- 田中 淳「日本における災害研究の系譜と領域」大矢根淳ほか編『シリーズ災害と社会1 災害社会学入門』弘文堂、2007、pp. 29-34.
- 田中雅一・松島健編『トラウマを生きる』京都大学学術出版会、2018.
- 圭室文雄「寺院本末帳の性格と問題点」寺院本末帳研究会編『江戸幕府寺院本末帳集成』下巻、雄山閣出版、1981、pp. 5-26.
- 田村栄太郎『世直し』雄山閣、1960.
- 大道寺友山著、萩原龍夫他校注『落穂集』人物往来社、1967.
- 大本山増上寺『増上寺史料集』第七巻、大本山増上寺、1980.
- 地方史研究協議会編『地方史研究』359号、2012年10月.
- 中央防災会議・災害教訓の継承に関する専門委員会『1783 天明浅間山噴火報告書』、2006.

- 寺尾寿芳「正義をめぐる共同性・公共性・無縁性——『記憶と和解』の彼方へ」『日本カトリック神学会誌』14、2003、pp. 111-132.
- 寺島良安著、島田勇雄ほか訳注『和漢三才図会』1（東洋文庫447）、平凡社、1985.
- 東京市役所編『東京市史稿』変災編第一巻、東京市役所、1914.
- 『東京市史稿』変災編第四巻、東京市役所、1917.
- 『東京市史稿』市街編第七巻、東京市役所、1930.
- 『東京市史稿』産業編第五巻、東京都、1956.
- 東京大学地震研究所編『新収日本地震史料』1-6 券・別巻・補遺、東京大学地震研究所、1981-1994.
- 『東京府管内統計表 明治9年度』東京市、1877.
- 富沢達三『「鯰絵の世界」と民衆意識』『日本民俗学』208、1996、pp. 85-105.
- 「幕末風刺画と鯰絵」『神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科 歴史民俗資料研究』2、1997、pp. 20-37.
- 『「時事錦絵」としての鯰絵』『史潮』50、2001、pp. 4-25.
- 「はしか絵の情報世界」『関東近世史研究』51、2002、pp. 26-50.
- 『錦絵のちから——幕末の時事的錦絵とかわら版』文生書院、2005.
- 豊田武編『会津藩家世実紀』第一巻、吉川弘文館、1975.
- 土居 浩「異常死者葬法の習俗をめぐる」村上興匡他編『慰霊の系譜—死者を記憶する共同体』森話社、2013、pp. 127-158.
- 中井久夫編『1995年1月・神戸：「阪神大震災」下の精神科医たち』みすず書房、1995.
- 中村俊定ほか校注『古典俳文学大系1 貞門俳諧集一』集英社、1970.
- 中村伝五郎督屋著「年代記」西日本文化協会編『福岡県史』近世史料編 年代記（一）、福岡県、1990、pp. 713-767.
- 中村幸彦「仮名草子の説話性」『近世小説史の研究』桜楓社、1961、pp. 30-62.
- 永島芳郎編『福岡史考』福岡市教育會、1936.
- 長野源太夫著「長野日記」秀村選三編『近世博多史料』第一集、西日本文化協会、1981、pp. 57-334.
- 西尾和美「室町中期京都における飢饉と民衆——応永二十八年及び寛正三年の飢饉を中心として」『日本史研究』275、1985、pp. 52-80.
- 西野光一「福岡藩における享保の飢饉と救済信仰——飢人地藏祭の成立背景と飢饉をめぐる信仰」『仏教文化学会紀要』15、2007、pp. 62-89.
- 西村 明『戦後日本と戦争死者慰霊——シズメとフルイのダイナミズム』有志舎、2006.
- 「戦争死者をめぐる無縁空間と権力空間」『宗教研究』80（4）、2007、pp. 976-977.
- 「飢人地藏夏祭り」福岡市史編集委員会編『新修福岡市史』民俗編一、福岡市、2012、pp. 129-138.

- 西山昭仁「寛文二年（一六六二）近江・若狭地震における京都での被害と震災対応」『京都歴史災害研究』5、2006、pp. 39-54.
- 西山昭仁・東幸代・北原糸子・小松原琢・寒川旭・武村雅之・水野章二『1662 寛文近江・若狭地震報告書』中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会、2005.
- 西山松之助「江戸町人総論」西山松之助編『江戸町人の研究』第一巻、吉川弘文館、1972、pp. 1-42.
- 「火災都市江戸の実体」西山松之助編『江戸町人の研究』第五巻、吉川弘文館、1978、pp. 1-90.
- 西山美香「五山禅林の施餓鬼会について——水陸会からの影響」『駒沢大学禅研究所年報』17、2006、pp. 31-55.
- 日蓮著、佐藤弘夫訳注『立正安国論』講談社学術文庫 1880、講談社、2008.
- 新田一郎『相撲の歴史』山川出版社、1994.
- 日本医史学会編『図録日本医事文化史料集成』第四巻、三一書房、1978.
- 『日本国語大辞典』第二版、小学館、2000-2002.
- 日本史研究会編『日本史研究』597号、2012年5月.
- 日本宗教学会編『宗教研究——特集〈災禍と宗教〉』86(2)、2012.
- 日本民具学会編『日本民具辞典』ぎょうせい、1997.
- 野口武彦『安政江戸地震——災害と政治権力』筑摩書房、1997.
- 羽賀祥二「一八九一年濃尾震災と死者追悼——供養塔・記念碑・記念堂の建立をめぐる」『名古屋大学文学部研究論集 史学』45、1999、pp. 253-284.
- 「戦病死者の葬送と招魂——日清戦争を例として」『名古屋大学文学部研究論集 史学』46、2001、pp. 83-112.
- 「戦争・災害の死者の〈慰霊〉〈供養〉——一八九〇年代の東海地域を中心として」國學院大學研究開発推進センター編『霊魂・慰霊・顕彰——死者の記憶装置』錦正社、2010、pp. 214-237.
- 「大量死の時代と社会的対応——一八九〇年代の死者追悼の形と観念」『日本思想史学』47、2015、pp. 13-19.
- 芳賀 登『世直しの思想』雄山閣出版、1984.
- 橋本伯壽著「國字斷毒論」（1810）森嘉兵衛・谷川健一編『日本庶民生活史資料集成』第七巻、三一書房、1970、pp. 93-119.
- 服部祥子・山田富美雄編『阪神・淡路大震災と子どもの心身：災害・トラウマ・ストレス』名古屋大学出版会、1999.
- 浜地利兵衛著「享保十七壬子大變記」山田龍雄ほか編『日本農書全集』67巻 災害と復興 2、農山漁村文化協会、1998、pp. 159-203.
- 林 英夫・青木美智男編『番付で読む江戸時代』柏書房、2003.
- 速水 侑『地藏信仰』はなわ新書 049、塙書房、1975.

- 原田正俊「五山禅林の仏事法会と中世社会——鎮魂、施餓鬼、祈祷を中心に」『禅学研究』77、1999、pp. 59-92.
- ハルトムート・オ・ローテルムンド「疱瘡絵・麻疹絵に見たる庶民信仰の諸形態」町田市立博物館編『(展示図録) 錦絵に見る病と祈り』町田市立博物館、1996、pp. 9-16.
- 朴 炳道「近世災害における『世なおし』の呪文と『泥の海』の終末——1662年の京都大地震と『かなめいし』」『東京大学宗教学年報』33、2016、pp. 47-64.
- 東島 誠『公共圏の歴史的創造——江湖の思想へ』東京大学出版会、2000.
- 久留侑子「松山地域における享保の飢饉の餓死者供養について」『地域創成研究年報』7、2012、pp. 45-76.
- 比留間尚『江戸の開帳』吉川弘文館、1980.
- ひろたまさき「『世直し』に見る民衆の世界像」吉田孝ほか編『日本の社会史 7—社会観と世界像』岩波書店、1987、pp. 261-298.
- 福田 周「鯰絵にみる震災体験の心理的関与によるイメージ化過程」『死生学年報 2014——語られる生と死』リトン、2014、pp. 207-236.
- 藤井裕之「疱瘡・麻疹にみる病観——疱瘡絵とはしか絵の比較」『近畿民俗』142・143、1995、pp. 1-16.
- 藤井正雄「無縁仏考」『日本民俗学』74、1971、pp. 55-61（大島健彦編『無縁仏』岩崎美術社、1988、pp. 14-27 へ再録）.
- 富士川游著、松田道雄解説『日本疾病史』東洋文庫 133、平凡社、1962（初版 1912）.
- 藤野達善『飢人地蔵物語』私家版、1985.
- 藤原聖子「『呪術』と『合理性』再考——前世紀転換期における〈宗教・呪術・科学〉三文法の成立」『思想』934、2002、pp. 120-141.
- 「大震災は『神義論』を引き起こしたか」国際宗教研究所編『現代宗教 2012——「特集」大災害と文明の転換』秋山書店、2012、pp. 49-68.
- 朴澤直秀「近世の仏教」大津透ほか編『岩波講座日本歴史』第11巻近世2、岩波書店、2014、pp. 247-278.
- 堀江英一『明治維新の社会構造』有斐閣、1955.
- 『本所回向院記』（『寛明炎餘類記』五の二十四丁ウー二十八丁オ所引、国立公文書館内閣文庫所蔵写本、請求番号 166-500）.
- 町田市立博物館編『(展示図録) 錦絵に見る病と祈り』町田市立博物館、1996.
- 三浦隆司「『世直し』の再考察——宗教史的観点から」岩田真美・桐原健真編『カミとホトケの幕末維新——交錯する宗教世界』法蔵館、2018、pp. 79-102.
- 三木 英『復興と宗教——震災後の人と社会を癒すもの』東方出版、2001.
- 水江漣子「仮名草子の記録性——『むさしあぶみ』と明暦の大火」『日本歴史』291、1972年8月号、pp. 87-100.
- 南 和男「文久の「はしか絵」と世相」『日本歴史』512、1991、pp. 88-106.

- 『江戸の風刺画』吉川弘文館、1997.
- 『幕末江戸の文化——浮世絵と風刺画』塙書房、1998.
- 峰岸純夫『中世災害・戦乱の社会史』吉川弘文館、2011.
- 「災害と元号と天皇」同『中世災害・戦乱の社会史』吉川弘文館、2011、pp. 72-104.
- 三原良吉「災害金石志」宮城県史編纂委員会編『宮城県史』22 災害、宮城県、1962、pp. 231-327.
- 宮崎ふみ子「鯰絵は何を語るのか」『ドキュメント災害史 1703-2003——地震・噴火・津波、そして復興』国立歴史民俗博物館、2003、pp. 142-151.
- 宮田 登『ミロク信仰の研究』未来社、1975（初版 1970）.
- 『江戸のはやり神』筑摩書房、1993（初版『近世の流行神』評論社、1972）
- 「『世直し』の原義——歴史学と民俗学の接点から」竹田聴洲博士還暦記念会編『日本宗教の歴史と民俗』隆文館、1976、pp. 533-557.
- 「祀り棄ての論理」『都市民俗論の課題』未来社、1982、pp. 177-190.
- 『終末観の民俗学』筑摩書房、1998（初版 1987）.
- 宮田 登・高田衛監修『鯰絵——震災と日本文化』里門出版、1995.
- 武者金吉「地鯰居士雑筆」『地震 第 1 輯』Vol. 11 No. 11、1939、pp. 537-541.
- 武者金吉編『日本地震史料』毎日新聞社、1951.
- 村上興匡他編『慰霊の系譜——死者を記憶する共同体』森話社、2013.
- 村上重良『慰霊と招魂——靖国の思想』岩波書店、1974.
- 村上重良・安丸良夫校注『日本思想大系 67——民衆宗教の思想』岩波書店、1971.
- 諸橋轍次著、鎌田正・米山寅太郎修訂『大漢和辞典』巻七、大修館書店、1985.
- 安田政彦『災害復興の日本史』吉川弘文館、2013.
- 安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』青木書店、1974.
- 『出口なお——女性教祖と救済思想』岩波書店、2013（初版 1977）.
- 矢田挿雲『江戸から東京へ』1、東光閣書店、1921.
- 矢田俊文『中世の巨大地震』吉川弘文館、2009.
- 『近世の巨大地震』吉川弘文館、2018.
- 柳田國男『赤子塚の話』（1920）『柳田國男全集』3、筑摩書房、1997、pp. 5-44.
- 『先祖の話』（1946）『柳田國男全集』13、ちくま文庫、1990、pp. 7-209.
- 『海上の道』（1961）『柳田國男全集』1、ちくま文庫、1989、pp. 7-296.
- 山本武夫校注『玉露叢』上、人物往来社、1967.
- 笠亭仙果著「なみの日並」『日本随筆大成』第 2 期 24 卷、吉川弘文館、1975、pp. 385-411.
- 両国回向院編『回向院由来記』回向院、1937.
- 歴史科学協議会編『歴史評論』750 号（2012 年 10 月）、760 号（2013 年 8 月）.
- 歴史学研究会編『震災・核災害の時代と歴史学』青山書店、2012.

————『歴史学研究』898号(2012年10)、903号(2013年3月)、909号(2013年9月)、916号(2014年3月)、922号(2014年9月)、929号(2015年3月)、935号(2015年9月)、942号(2016年3月)、948号(2016年9月)、955号(2017年3月)、961号(2017年9月)。

歴史と文学の会編『新視点徹底追跡 方丈記と鴨長明』勉誠出版、2012。

渡辺尚志『浅間山大噴火』吉川弘文館、2003。

渡辺 誠『回向院史』宗教法人回向院、1992。

2. 洋書 (論文及び単行本)

Barkun, Michael. *Disaster and the Millennium*. London: Yale University, 1974. マイケル・バークン『災害と千年王国』北原糸子訳、新評論、1985。

Cohen, Alvin P. "Coercing the Rain Deities in Ancient China." *History of Religions* 17, nos. 3/4, 1978, pp. 244-265.

Cohn, Norman. *The Pursuit of the Millennium*. Oxford: Oxford University Press, 1970(orig. 1957). ノーマン・コーン『千年王国の追求』江河徹訳、紀伊國屋書店、2008。

Eliade, Mircea. "Cargo-Cults and Cosmic Regeneration," in Sylvia L. Thrupp, ed. *Millennial Dreams in Action: Studies in Revolutionary Religion Movements*. New York: Schocken Books, 1970, pp. 139-143.

————. *Traité d'histoire des religions*. Paris: Payot, 1949. ミルチャ・エリアーデ『宗教学概論』1-3、堀一郎監修・久米博訳、せりか書房、1974。

————. *Histoire des croyances et des idées religieuses*. Paris: Payot, 1976-1983. ミルチャ・エリアーデ『世界宗教史』1-3、荒木美智雄・中村恭子・松村一男ほか訳、筑摩書房、1991。

Frazer, J. G. *The Golden Bough: A Study in Comparative Religion*. Vol.1, London, 1890.

Fritz, Charles E. "Disasters." in R. K. Merton and R. A. Nisbet, eds. *Contemporary Social Problems: An Introduction to the Sociology of Deviant Behavior and Social Disorganization*. New York: Harcourt, Brace & World, 1961, pp. 651-694.

Gaillard, J. C. & Texier, P. "Religion, Natural hazard, and Disaster: An Introduction." *Religion* Vol. 40, Issue 2, 2010, pp. 81-84.

Geertz, Clifford. *The Interpretation of Cultures*. New York: Basic Books, 1973. クリフオード・ギアツ『文化の解釈学』吉田禎吾ほか訳、岩波書店、1987。

Hanska, Jussi. *Strategies of Sanity and Survival: Religious Responses to Natural Disasters in the Middle Ages*. Helsinki: Finnish Literature Society, 2002.

- Herman, Judith L. *Trauma and Recovery: The Aftermath of Violence from Domestic Abuse to Political Terror*. New York: Basic Books, 1992. ジュディース・ハーマン『心的外傷と回復』中井久夫訳、みすず書房、1996.
- Hershiser, Marvin R., E. L. Quarantelli. "The Handling of the dead in a disaster." in Richard A. Kalish, ed. *Death and Dying: Views from many cultures*. New York: Baywood Pub. Co, 1980, pp. 132-144.
- International Labour Office. *Prevention of Major Industrial Accidents*. Geneva: International Labour Office, 1991.
- Jankélévitch, Vladimir. *La Mort*. Paris: Flammarion, 1966. V. ジャンケレヴィッチ『死』仲澤紀雄訳、みすず書房、1977.
- Lincoln, Bruce. "'The Earth Becomes Flat': A Study of Apocalyptic Imagery." *Comparative Studies in Society and History* 25, 1983, pp. 136-153.
- Merli, Claudia. "Context-bound Islamic Theodicies: The Tsunami as Supernatural Retribution vs. Natural Catastrophe in Sothern Thailand." *Religion* Vol. 40, Issue 2, 2010, pp. 104-111.
- Ouwehand, Cornelius. *NAMAZU-E and Their Themes: An Interpretative Approach to Some Aspects of Japanese Folk Religion*. Leiden: E. J. Brill, 1964. コルネリウス・アウエハント『鯰絵——民俗的想像力の世界』小松和彦ほか訳、せりか書房、1979.
- Perry, Ronald W. "Chapter 1 What is a Disaster?" in Havidan Rodriguez, E. L. Quarantelli, and Russell R. Dynes, eds. *Handbooks of Disaster Research*. New York: Springer, 2006, pp. 1-15.
- Prince, Samuel Henry. *Catastrophe and Social Change: Based Upon a Sociological Study of the Halifax Disaster*. New York: Columbia University Press, 1920.
- Quarantelli, E. L. "Presidential address: What should we study?" *International Journal of Mass Emergencies and Disasters* 5, 1987, pp. 7-32.
- . "Disaster Research." in E. Borgatta, and R. Montgomery, eds. *Encyclopedia of Sociology*. New York: Macmillan, 2000, pp. 682-688.
- . "Catastrophes are Different from Disasters: Some Implications for Crisis Planning and Managing Drawn from Katrina." Jun.11 2006(<http://understandingkatrina.ssrc.org/Quarantelli>)(opened Feb. 5, 2018)
- Quarantelli, E. L. and Ronald W. Perry, eds. *What is a Disaster: New Answers to Old Questions*. Philadelphia: Xlibris, 2005.
- Quarantelli, E. L., ed. *What is a Disaster?: A Dozen Perspectives on the Question*. New York: Routledge, 1998.
- Raphael, Beveley. *When Disaster Strikes: How Individuals and Communities Cope with Catastrophe*. New York: Basic Books, 1986. ビヴァリー・ラファエル『災害の襲うとき——カタストロフィーの精神医学』石丸正訳、みすず書房、1995（初版1989）。

- Rodriguez, Havidan, E. L. Quarantelli, and Russell R. Dynes, eds. *Handbooks of Disaster Research*. New York: Springer. 2006.
- Rotermund, Hartmut O. *Hôsoôgami ou la petite vérole aisément*. Paris: Maisonneuve & Larose, 1991.
ハルトムート・オ・ローテルムンド『疱瘡神——江戸時代の病いをめぐる民間信仰の研究』岩波書店、1995.
- Schafer, Edward H. “Ritual Exposure in Ancient China.” *Harvard Journal of Asiatic Studies*14, 1951, pp. 130-184.
- Sladen, Douglas. “Chapter 8 Japanese Fireman.” *The Japs at Home*. London: Collins' Clear-Type Press, 1895, pp. 90-91.
- Smith, Jonathan Z. *Map Is Not Territory: Studies in the History of Religions*. Chicago and London: The University of Chicago Press, 1993(orig. 1978).
- . *Imagining Religion: From Babylon to Jonestown*. Chicago: The University of Chicago Press, 1982.
- Solnit, Rebecca. *A Paradise Built in Hell : The Extraordinary Communities That Arise in Disaster*. New York: Viking, 2009. レベッカ・ソルニット『災害ユートピア——なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』高月園子訳、亜紀書房、2010.
- Sorokin, P. A. *Man and Society in Calamity: The Effects of War, Revolution, Famine, Pestilence upon Human Mind, Behavior, Social Organization and Cultural Life*. New York: Dutton, 1942.
- Schlehe, Judith. “Anthropology of Religion: Disasters and the Representation of Tradition and Modernity.” *Religion* Vol. 40, Issue 2, 2010, pp. 112-120.
- Tylor, E. B. *Primitive Culture: Researches into the Development of Mythology, Philosophy, Religion, Art and Custom*. Vol.1, 2, London, 1871.
- Wolf, Arthur P. “Gods, Ghosts, and Ancestors.” in Arthur P. Wolf, ed. *Religion and Ritual in Chinese Society*. Stanford: Stanford University Press, 1974, pp. 131-182.

3. 中国語文献（論文及び単行本）

- 許進雄『中國古代社會：文字與人類學的透視』臺灣商務印書館、1995。
許慎撰・段玉裁注『説文解字注』上海古籍出版社、1998。

4. 韓国語文献（論文及び単行本）

- 金錫佑『자연재해와 유교국가-한대의 재해와 황정 연구（自然災害と儒教国家——漢代の災害と荒政研究）』イルジョガク、2006。

論文の内容の要旨

論文題目 近世日本における災害の宗教学的的研究——呪術・終末・慰霊・象徴——

氏名 朴 炳道

本論文は、「近世日本の災害」を事例として、「災害と宗教」研究という、宗教学における新しい研究分野の必要性を提起し、その可能性を考察する研究である。

第一章では、「災害」概念が「自然性と人為性」、「歴史性と地域性」をもつため、その定義が容易ではないことを指摘した上、本研究の作業仮説的な「災害」の定義として、「事態性」、「被害性」、「社会性」、「宗教性」という四つの特徴を提示した。災害をめぐる宗教学的理解の歴史は、「象徴としての災害」と「事態としての災害」を対象にした研究とに区分できるが、本研究は「事態としての災害」、その中でも「トラウマとしての災害」を研究対象にする。「トラウマとしての災害」は、人間の限界状況を作り上げ、物理的被害のみならず、心理的な衝撃と苦痛をもたらす。そうした「災害」をめぐる近世日本人の「認識」と「対処」を、とくに「呪術」・「終末」・「慰霊」・「象徴」という宗教学的観点から分析することが本研究の目的である。

第二章では、近世日本の災害研究の資料論として「災害見聞記」の重要性を考察した。中世日本の『方丈記』と『立正安国論』は、具体的な災害をとりあげてその際の人々の認識と対処の様子に言及しており、また近世の災害記録に大きな影響を与えた点で、近世「災害見聞記」の原型といえる。災害を見聞きそれを書き残すこと自体を目的とする本格的な「災害見聞記」は近世から登場し、近世日本の災害研究に欠かせない資料となる。その中で 1662 年の近江・若狭地震の「災害見聞記」である浅井了意の『かなめいし』をとりあげて分析した。『かなめいし』には、近世初期京都での地震災害をめぐる人々の多様な認識と対処がよく描かれている。地震災害を防ぐための「呪術」として、地震除けの呪文、歌の札を貼ること、託宣、鹿島信仰が紹介されており、また地震災害による「終末」意識として「泥の海」と「火の玉」などのイメージが提示されている。その中でも「世なおし」の呪文と「泥の海」の終末意識は、これ以降近世民俗・民衆宗教史における変革論と救済論との関連を推測させる点で重要と思われる。

第三章・第四章・第五章では、近世災害における災害死者の発生・埋葬・慰霊と記憶の問題を考察した。とくに災害は「大量の無縁死者」をもたらすという点で量的にも質的にも特殊な死者発生状況を作り上げる。

第三章では、1657 年の明暦の大火という火災を事例としてとりあげ、「災害死者」をめぐる様々な問題を考察した。とくに火災による大量死者の問題を考察する方法として、集団埋葬地に開創された「諸宗山無縁寺回向院」という寺院に注目した。回向院は明暦の大火の災害死者の慰霊のために諸宗派の寺院から僧侶が集まり、合同慰霊を行った超宗派的な寺院として誕生したという認識が、江戸時代から始まり、現在まで続いている。しかし、当時の

資料を再検討することで、慰霊の儀式に集まった僧侶は、浄土宗の僧侶で、その儀式も浄土宗の追善供養の作法によるものであったことを明らかにした。それを踏まえて、「諸宗山無縁寺回向院」という回向院初期の名称の意味が、「諸宗」の「無縁」死者を「回向」する寺院であることを、集団埋葬の意味や、近世寺檀制度における死者処理の限界を考察することから示そうとした。また、近世における回向院の歴史全体を通して、回向院が様々な災害死者や事故死者などの慰霊の空間、または庶民信仰・娯楽の空間にまでその性質を拡大していくことになった背景には、災害死者の慰霊に参加する幅広い生者の関わりがあることも指摘した。

第四章では、1732～1733年に西日本を中心に発生した享保の大飢饉を事例としてとりあげた。まず、享保の飢饉の概要と死者発生の場面をみるために、藩の記録や「災害見聞記」を参考にし、冷害と虫害による飢饉の発生から凶作による米価の上昇、食糧不足による移動、その中で人々が行き倒れて死に至る過程を描いた。そして、飢饉死者の個別埋葬と集団埋葬の様子、藩による施餓鬼の実施の様子にふれた。それに加え、民間での災害死者の埋葬と慰霊の様子をみるために、『飢人地蔵物語』という資料をとりあげて、そこに収められた供養塔と地蔵像の銘文を分析した。その分析から現在も福岡で行われている「川端飢人地蔵夏祭り」とその地蔵像に中心とした「飢人地蔵信仰」の歴史が、飢饉死者の集団埋葬地の上に死者慰霊の目的で建てられた「地蔵像」から出発した可能性を指摘した。それは、飢饉当時に多く建てられた地蔵像の銘文から確認される。また供養塔の銘文からも、村の飢饉死者を集団埋葬した場所の上に塔が建てられたことや、供養塔が村共同の慰霊を目的に建立されたこと、災害死者が「三界万霊」・「餓死亡霊」など集団的存在として捉えられていることを確認した。こうした地方での飢饉死者の事例から、民俗信仰としての地蔵信仰が飢饉死者慰霊のかたちで表れたという点は注目に値する。

第五章では、第三章と第四章での議論を踏まえて近世災害死者の全般的な特徴を考察した。とくに近世災害死者をめぐる生者の認識と実践を「無縁」の概念を用いて説明しようとした。死者としての「無縁」の概念には「無主」と「無遮」という動的で、相互補完的なふたつの意味が存在する。「無主」が「無関係」を意味するとすれば、「無遮」は「無差別」・「無制限」を意味する。弔う縁者の不在という「無主」の死者は、生者によって認識論的に創出された周縁的な存在であり、中国、朝鮮、日本など東アジアでは共通に認識されている存在である。中世日本では、こうした「無主」の災害死者が「法界」・「三界万霊」と呼ばれており、近世に入ってはそれらとともに、「無縁」・「有縁無縁」などの名称も登場する。それは様々な近世災害死者の供養塔と地蔵像の銘文を通して確認される。この「無縁」・「有縁無縁」・「三界万霊」として認識された近世の災害死者の意味は、その名称に込められている「無縁死者」と「無縁生者」の動的な関係から把握しなければならない。それは生者による災害死者の「無主性」の認識の過程と、集団埋葬や慰霊における無縁死者の「無遮性」の創出という過程で表れており、災害死者が「平等的」・「諸宗的」・「集団的」存在として認識されていたことからよく確認される。このような災害死者の「無縁」という性格は、災害死

者自身がもつ性格というより、無縁死者供養に参加する「無縁生者」との関係性の中で現れる性格である。

第六章と第七章では、「象徴」のキーワードを中心に近世末の災害と、その後登場した絵画に注目し、災害の認識と対処における「災害象徴」の意味を考察した。

第六章では1862年に起きた文久麻疹大流行と、その際に江戸で登場した「はしか絵」という絵画を対象とした。「はしか絵」が麻疹大流行という災害事態をめぐる認識と対処の象徴化であるという観点から、「はしか絵」全体を分類し、個々の絵を具体的に分析した。災害原因の象徴化としての「はしか絵」には、麻疹を起こす超自然的な存在が描かれており、また詞書には麻疹の周期性や症状の説明も書かれている。その原因論を踏まえて、災害対処の象徴化として麻疹を防ぐ、あるいは治す超自然的な存在、また呪術や養生の情報の紹介、ひいては世相を描く風刺の側面も表れている。このように、本研究において災害事態との緊密な関係の中で把握した「はしか絵」は、従来指摘されてきた呪術紹介の側面のみ、あるいは医療情報の共有の側面のみにとどまらない多様な内容が表れており、それは「緊急事態における災害認識や災害対処の象徴化」という実用的な側面によるものである。一枚の「はしか絵」の中に呪術性と情報性が同時に表れていることも、災害の事態を理解し、それを乗り越えようとする「実用性」の観点から評価すべきである。

第七章では、「はしか絵」をめぐる議論をさらに拡大させ、近世末の災害とその後登場した絵画全体を「災害錦絵」として分類し、それらを分析した。「疱瘡絵」、1855年の安政江戸地震と「鯰絵」、1858年の安政コレラ大流行と「コレラ絵」、1862年の文久麻疹大流行と「はしか絵」がそれである。災害をめぐる認識と対処の象徴化として「災害錦絵」が登場したという観点から、三つの共通する問題を取りあげた。一つ目は災害を起こす存在と防ぐ存在が悪神と善神として描かれている点である。「鯰絵」のみこの悪神と善神の間に象徴変換が起こっており、それを象徴変換と無変換の理論から考察した。二つ目は「災害錦絵」における笑いと悲しみの問題である。従来に提示された「災害錦絵」の諧謔と風刺に対する説明を再検討するとともに、「災害錦絵」における「死」と「悲しみ」の表現にふれ、「災害錦絵」は「災害見聞記」とは異なり、「災害」自体をありのままに表現することが目的ではなかったことを指摘した。三つ目は、「災害錦絵」の代表的な実用性である「呪術性」の問題である。「災害錦絵」の呪術性は、絵自体を用いる「物理的呪術性」とともに、図柄を通して表れる「象徴的呪術性」の両側面を考慮しなければならない。この三つの問題の考察から、当時の他の錦絵と区別できる「災害錦絵」の特徴が指摘できた。それは「災害」という緊急事態における災害認識と災害対処の象徴化として、実用的な目的をもって現れたということである。

第八章では、本研究全体をまとめてその意義を提示するとともに、本研究で十分考察できなかった課題や、将来的に取り組むべき課題について、日本宗教研究の観点、比較研究の観点、一般理論化の観点という三つの観点からふれ、「災害と宗教」研究の将来的な可能性を考察した。